

能登輪島エクスカージョン報告

山本 早苗

2006年4月22～23日にかけて、能登輪島エクスカージョンをおこなった。参加者は、筆者をのぞき、コモンズ研究会の会員4名、金沢大学の赤石大輔さんの合計6名。地元の受け入れ先は、「春蘭の里」を営まれている多田喜一郎さん、能登輪島のガイドや駐村研究員をされている「有限会社のと」の岡本宣雄さんをお願いしてお世話になった。

ふるくから製塩業がさかんな能登輪島は、里山の塩木利用がおこなわれてきた地域であるとともに、棚田やため池が発達してきた地域でもある。いま天然塩づくりが再び活気づくなど、あらたな局面も迎えている。

今回のエクスカージョンの目的は、能登輪島で暮らしてきた人びと、地域づくりにたずさわってきた人たち、能登の里山を研究してきた人たちにお話をうかがい、里山・棚田と地域の人びととの自然とのかかわりの歴史を学ぶことであった。

そもそも2006年3月に、のとタウンミーティングに参加したことが、今回のエクスカージョンのきっかけとなった。能登では、まちづくりに先進的に取り組まれている。タウンミーティングは、平成14年度からはじめられた取り組みで、金沢大学が、能登半島のそれぞれの地域を訪れて、その地域で活動している人たちと一緒に、能登のこれからの地域づくりのありかたや大学のはたす役割を一緒に考え、あらたなパートナーシップを築くきっかけづくりの一環としてなされてきた。大学、企業、市民活動、地域住民が一体となって、それぞれの個性をいかしたまちづくりを展開し、地場産業の振興や生涯教育・環境教育とリンクし、さらには地域の人たちが地域を学び発信する駐村研究員を創設するなど大変ユニークな活動である。龍谷大学・里山ORCでも、ぜひとも展開してみたい活動であり非常に刺激を受けた。

このタウンミーティングで共有された里山認識に深く共感して、今回のエクスカージ

ョンを企画した。とくに「里山は『利用』するっていうのとは違う、暮らしの場そのものであり、集落の『生き様』そのものなんです」という参加者の言葉に感銘を受けた。タウンミーティングに参加されていた春蘭の里の経営者である多田さんと意気投合し、エクスカージョンの企画段階からご協力いただいた。

エクスカージョン初日は、まず春蘭の里で手入れされている山菜採りのヤマに入って、山菜採り体験をし、肉を使わず、すべて山菜だけをつかって作られた昼食をいただいた。女性と里山とのかかわりについてお話をうかがい、食をつうじて得られる里山利用の知恵と工夫に驚かされる。昼食をおえると、棚田百選に指定されている白米の千枚田を案内してもらい、源流ちかくから棚田まで歩いて、棚田での水利用と棚田の変化について説明を受けた。

つぎに、奥能登塩田村・揚浜館にて、製塩業の歴史と里山利用とのかかわりについて勉強した。近畿の里山は、基本的に、薪・肥料・山菜・キノコ採りの利用がほとんどである。しかしながら、北陸はじめ日本海岸沿いの里山は、塩木とよばれる製塩用の燃料木の役割がなによりも大きかったそうである。近畿の里山が、家ごとの生活に密接に結びついたものであるとすると、北陸の里山は、むらの生産に密接に結びついたものであるといえる。ここで、キノコ・山菜利用の東と西、能登輪島の里山利用とキノコの歴史について、それぞれ齋藤さんと赤石さんからレクチャーをうけた。

最終日は、岡本さんの案内で、能登輪島の文化的景観を案内していただき、能登輪島で暮らす人びとの魅力にどっぷりと浸かって、あらためて能登半島の歴史の深さや能登半島の自然の多様さと人びとの暮らしの知恵と工夫の巧みさについて考えさせられた。わずか一泊二日で能登半島を一周するエクスカージョンだったが、近畿の里山利用と対照的な能登輪島の里山利用のありかたを学ぶことができ、参加者は、それぞれに大きな収穫を得ることができた。